査を2002年2～3月に実施しました。調査区は北区15㎡と南区2㎡を設けました。北区では奈良時代の四王堂創建時の西北隅の掘立柱穴を検出しました。柱穴は一辺が2m以上と巨大です。柱を抜き取った後、ほぼ重複した位置に礎石を据えた礎石据付穴を確認しました。基壇には平安時代の瓦積み外装が残り、西大寺創建時から平安時代までの瓦のほか、凝灰岩や川原石も用いられています。創建時の建物や基壇の規模を踏襲して、平安時代に礎石建物へと造り替えたと推定されます。創建時の四王堂は過去の調査とあわせると、東西が約32.5m、ほぼ11丈となり、西大寺に伝わる資財帳の記載に一致します。南区では地表下30㎝が地山で、くぼみをいくつか検出したのみです。（平城宮跡発掘調査部）

四王堂発掘現場（北西から）

藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第117次）

大極殿院の東面回廊などを対象とした南区につづき、去年の12月からは、大極殿東方に建つ「東殿」を対象とした北区の調査にはいっています。

この部分は、もとの鴨公小学校・幼稚園の敷地にあたり、それにともなう攪乱を受けています。そのため、遺構の残りはあまりよくありません。しかし、約60年前に日本古文化研究所が壺掘り調査した成果を、あらためて見直さなければならない多くの知見が得られつつあります。

まず、大極殿院回廊は、従来、「東殿」以北が単廊（梁行の柱間が1間）と復元されていましたが、「東殿」以南と同じく、複廊（梁行の柱間が2間）であることがほぼ確実となりました。

そして、「東殿」についても、これまでは桁行7間、梁行4間と復元されていましたが、少なくとも梁行については、それよりかなり小さくなることが判明しつつあります。今後、「東殿」の性格についても再検討が必要となりそうです。

細部では何かと疑問点が多かった藤原宮大極殿院の構造を、より整理されたかたちでご報告できる日も近いでしょう。

大極殿院「東殿」と大極殿土壇（東から）

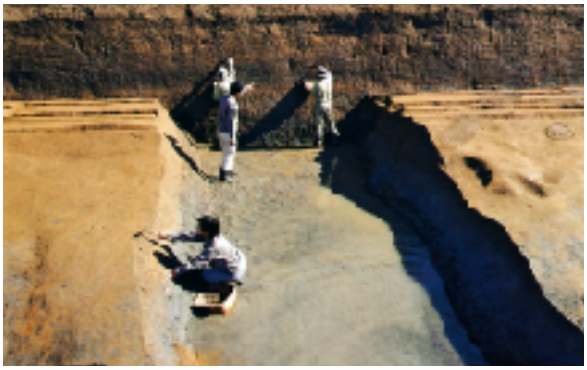
藤原宮東南官衙地区の調査（飛鳥藤原第118次）

2001年10月末から2002年2月までおこなった、高所寺池という溜池の堤防改修工事にともなう調査です。池の東・北・西の三面を、総延長200m、およそ2000㎡にわたって発掘しました。調査区は、藤原宮の南面大垣と内外の濠を含み、「東南官衙地区」とよんでいる区域にあたります。

調査にはいってまもなく、大垣とその南北に濠がみつかりました。藤原宮の大垣は、掘立柱を土壁でつなぎ、瓦葺きの屋根をのせた構造です。ただ、大垣と内濠はほぼ想定位置で発見されたのですが、外濠は想定位置よりも7m大垣寄りにありました。

調査区には、宮内先行条坊とよばれる藤原京の街路の一つ、東二坊坊間路がとおっています。普通、藤原宮の施設はこの先行条坊の側溝を埋め立てて造営されているのですが、南面の外濠は側溝と一時期共存しており、側溝を流れる水が外濠に注ぎ込むように掘り直されていました。まず、排水体系をつくり、そののち側溝をうめて大垣の柱をたてたり内濠を掘削していたのです。外濠の位置だけが想定位置とずれた理由も、このあたりにありそうです。

大垣の北側、つまり宮の内側では、役所の建物や


藤原宮南面の外濠（西から）